

# 三尺角拾遺

(木精)

泉鏡花

青空文庫



「あなた、冷えやしませんか。」

お柳は暗夜の中に、悄然と立つて、池に臨むで、其の肩を並べたのである。工學士は、井桁に組んだ材木の下なる端へ、窮屈に腰を懸けたが、口元に近々と吸つた巻煙草が燃えて、其若々しい横顔と帽子の鍔廣な裏とを照らした。

お柳は男の背に手をのせて、弱いものいひながら遠慮氣なく、

「あら、しつとりしてるわ、夜露が酷いんだよ。直にそんなものに腰を掛けて、あなた冷いでせう。眞とに養生深い方が、其に御病氣擧句だといふし、悪いわねえ。」

と言つて、そつと壓へるやうにして、

「何ともありませんか、又ぶり返すと不可ませんわ、金さん。」

其でも、ものをいはなかつた。

「眞とに毒ですよ、冷えると悪いから立つていらつしやい、立つていらつしやいよ。其方が増ですよ。」

といひかけて、あどけない聲で幽に笑つた。

「ほゝゝゝ、遠い處を引張つて來て、草臥れたでせう。濟みませんねえ。あなたも厭だと

いふし、其それに私わたしも、そりや様子やうすを知しつて居ゐて、一いつしよ所に苦勞くろうをして呉くれたからツたつても、  
※ねえさんには極きまりが悪わるくツて、内うちへお連れ申まをすわけには行ゆかないしき。我わがま儘まばかり、お寢よつて在いらつしやつたのを、こんな處ところまで連つれて來きて置おいて、坐すわつてお休やすみなさることさへ出で來きないんだよ。」

お柳りうはいひかけて涙なみだぐんだやうだつたが、しばらくすると、

「さあ、これでもお敷しきなさい、些少ちつとはたしになりますよ。さあ、」  
すりよ  
擦寄すりよつた氣勢けはひである。

「袖そでか、」

「お厭いや？」

「そんな事ことを、しなくツても可いい。」

「可よかありませんよ、冷ひえるもの。」

「可いいよ。」

「あれ、情じやうこほが強いねえ、さあ、えゝ、ま、瘦やせてる癖くせに。」と向むかうへ突ついた、男をとこの身みが浮ういた下したへ、片袖かたそでを敷しかせると、まくれた白しろい腕うでを、膝ひざに縋すがつて、お柳りうは吻ほっと呼吸いき。  
男をとこはぢつとして動うごかず、二人ふたりともしばらく黙だんまり然り。

やがてお柳の手がしなやかに曲つて、男の手に觸れると、胸のあたりに持つて居た巻煙草は、心するともなく、放れて、婦人に渡つた。

「もう私は死ぬ處だつたの。又笑ふでせうけれども、七日ばかり何にも鹽ツ氣のものは頂かないんですもの、斯うやつてお目に懸りたいと思つて、煙草も斷つて居たんですよ。何だつて一旦汚した身體ですから、そりやおつしやらないでも、私の方で氣が怯けます。其にあなたも舊と違つて、今のやうな御身分でせう、所詮叶はないと斷めても、斷められないもんですから、あなた笑つちや厭ですよ。」

といひ淀んで一寸男の顔。

「斷めのつくやうに、斷めさして下さいツて、お願ひ申した、あの、お返事を、夜の目も寝ないで待ツてますと、前刻下すつたのが、あれ……ね。

深川の此の木場の材木に葉が繁つたら、夫婦になつて遣るツておつしやつたのね。何うしたつて出来さうもないことが出来たのは、私の念が届いたんですよ。あなた、こんなに思ふもの、其位なことはありますよ。」

と猶しめやかに、

「ですから、最う大威張。其でなくツてはお聲だつて聞くことの出来ないので、押懸け

て行つて、無理に其の材木に葉の繁つた處をお目に懸けようと思つて連出して來たんです。

あなた分つたでせう、今あの木挽小屋の前を通つて見たでせう。疑ふもんぢやありませんよ。人の思ですわ、眞暗だから分らないつてお疑なされるのは、そりや、あなたが邪

慳だから、邪慳な方にや分りません。」

又黙つて俯向いた、しばらくすると顔を上げて斜めに巻煙草を差寄せて、

「あい。」

「……………」

「さあ、」

「……………」

「邪慳だねえ。」

「……………」

「えゝ！、要らなきや止せ。」

といふが疾いか、ケンドンに投げ出した、巻煙草の火は、ツツツと橢圓形に長く中空に流星の如き尾を引いたが、※と火花が散つて、蒼くして黒き水の上へ亂れて落ち

た。

屹きつと見て、

「お柳りゅう、」

「え、」

「およそ世よの中なかにお前まへ位らゐなことを、私わたしにするものはない。」

と重々おもくしく且かつ沈しづんだ調子てうしで、男をとこは肅然しゆくぜんとしていった。

「女房にようぼうですから、」

と立派りつぱに言いひ放はなち、お柳りゅうは忽たちまち震ふるひつくやうに、岸破がばと男をとこの膝ひざに頬ほをつけたが、消入きえい

さうな風采とりなりで、

「そして同年紀おなじとしだもの。」

男をとこは其頸そのなぢを抱だかうとしたが、フト目を反そらす水みづの面おも、一てん點ひの火まは未まだ消きえないで残のこつて

居ゐたので、驚おどろいて、じつと見みれば、お柳りゅうが投なげた巻煙草まきたばこの其それではなく、霽もやか、霧きりか、朦も

朧うろろとした、灰色はひいろの溜池ためいけに、色いろも稍濃やゝこく、筏いかだが見みえて、天窓あたまの圓まるい小ちひな形さかたちが一個乗ひとつのつ

蹲しゃがむで居ゐたが、煙管きせるを啣くはへたらうと思おもはれる、火ひの光ひかりが、ぼツちり。

又また水みづの上うへを歩行あるいて來きたものがある。が船ふねに居ゐるでもなく、裾すそが水みづについて居ゐるでもな

い。脊高く、霧と同鼠の薄い法衣のやうなものを絡つて、向の岸からひらくと。

見る間に水を離れて、すれ違つて、背後なる木納屋に立てかけた數百本の材木の中に消えた、トタンに認めたのは、緑青で塗つたやうな面、目の光る、口の尖つた、手足は枯木のやうな異人であつた。

「お柳。」と呼ぼうとしたけれども、工學士は餘りのことに聲が出なくつて瞳を据ゑた。爾時何事も知れず仄かにあかりがさし、池を隔てた、堤防の上の、松と松との間に、すつと立つたのが婦人の形、ト思ふと細長い手を出し、此方の岸を氣だるげに指招く。

學士が堪まりかねて立たうとする足許に、船が横ざまに、ひたとついで居た、爪先の乗るほどの處にあつたのを、霧が深い所爲で知らなかつたのであらう、單そればかりでない。

船の胴の室に嬰兒が一人、黄色い裏をつけた、紅の四ツ身を着たのが這つて、彼の婦人の招くにつれて、船ごと引きつけらるゝやうに、水の上をするゝと斜めに行く。

其道筋に、夥しく沈めたる材木は、恰も手を以て掻き退ける如くに、算を亂して颯と左右に分れたのである。

其が向う岸へ着いたと思ふと、四邊また濛々、空の色が少し赤味を帯びて、殊に黒ずんだ水面に、五六人の氣勢がする、囁くのが聞えた。

「お柳、」と思はず抱占めた時は、淺黄の手絡と、雪なす頸が、鮮やかに、狹霧の中に描かれたが、見るく、色があせて、薄くなつて、ぼんやりして、一體に墨のやうになつて、やがて、幻は手にも留らず。

放して退ると、別に堀際に、犇々と材木の筋が立つて並ぶ中に、朧々ともこのそあれ、學士は自分の影だらうと思つたが、月は無し、且つ我が足は地に釘づけになつてるのにも係らず、影法師は、薄くなり、濃くなり、濃くなり、薄くなり、ふらく動くから我にもあらず、

「お柳、」

おも  
思はず又、

「お柳、」

といつてすたくくと十間ばかりあとを追つた。

「待て。」

あでやかな顔は目前に歴々と見えて、ニツと笑ふ涼い目の、うるんだ露も手に取るば

かり、手を取らうする、と何にもない。掌に障つたのは寒い旭の光線で、夜はほの／

＼と明けたのであつた。

學士は昨夜、礫川なる其邸で、確に寢床に入つたことを知つて、あとは恰も夢のやう。今を現とも覺えず。唯見れば池のふちななる濡れ土を、五六寸離れて立つ霧の中に、唱名やうみやうこゑの聲、鈴りんの音、深川木場のお柳りうが※の門かどに紛まぎれはない。然しかも面おもてを打うつ一脈いちみやくの線せ香んかうの香にほひに、學士がくしはハツと我われに返かへつた。何なにも彼かも忘わすれ果はつて、狂氣きやうきの如ごとく、其家そのやを音信おとづれて聞きくと、お柳りうは丁ちやうど爾時そのとき……。あはれ、草木くさきも、婦人をんなも、靈魂たましひに姿すがたがあるのか。

# 青空文庫情報

底本：「鏡花全集 第四卷」岩波書店

1941（昭和16）年3月15日第1刷発行

1986（昭和61）年12月3日第3刷発行

入力：門田裕志

校正：小林繁雄

2003年11月11日作成

2011年3月22日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 三尺角拾遺

(木精)

2020年 7月18日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

著者 泉鏡花

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>